

時間軸と空間軸からみた自己の定位

—女子学生の親子の似より感をベースにして—

秋 山 幹 男

On The Self oriented to Time and Space axes

—Analyses based on *Similarity (Discrepancy)* between Daughter and her Parents—

Mikio Akiyama

自己と両親の三者関係を一括して捉えていく親子の似より感（または、ズレ感）研究、また、両親の娘・自分・配偶者の三者把握を同時に同じ面上で分析の対象にする筆者なりの似より感研究は、一貫して同じと考えてもよい結果を出し続けてきている。このことは、これまで他の研究者達が把握することのなかった、新しい何らかの真実の一端に触れているような手ごたえを感じる。1972年から2001年にかけて23回の調査を実施してきた。その内訳は、1970年代には4回、1980年代12回、1990年代で5回、そして2000年に入って2回である。これを大きくくくってみると、1972年と1980年、1980年と1990年、1990年と2000年といった8年スパン、10年スパンで29年間時々の思いを検証するために息の長い研究を続けてきたことになる。1970年代から1980年前半の頃の研究は、分析すればするほど深み（泥沼）にはまり込み、何を狙っているのかその意味をしっかりと見据えたと言えた代物ではまだなかった。1985年、1982年に調査した279名の女子学生のデータを因子分析にかけた。これは、同じ56の性格項目で自己と両親について回答した $279 \times 3 = 837$ のデータを一括処理したものである。ついで、共同研究者の有馬は、析出された4つの因子ごとの因子別得点を用いてクラスター分析も試みた。この時に使用されたのは平均距離法であったが、この方法を説明する文章の中に「似より」というキーワードを見つけたのである。この気づきがヒントになり、それまでのタイプ分析からこの「似より」をベースにした群分けに研究全体をシフトさせていくことができた。これは、調査に協力してくれた学生のデータをほぼ100パーセント生かすことができる。1988年の論文で、初めて“三者間の似よりもとづく分析”という活字を副題として付記した。

1994年には、一つの区切りとするため「親子の似より」研究の現状とそのパースペクティブをまとめたが、これを契機に研究の方向がある程度見えはじめだし、固まりかけてきたように思う。その当時指導を請うた早坂（故人）の指摘は、この研究のデータが認知次元のものであることに触れ、実際の行動次元や客観的なものではなくて主観的なものに基づいているので、「似より感」とすべきではないかというものであった。1997年の論文からは、この“似より（感）”が登場する。と同時に、この似より感は親と似よることの少ない学生にとっては両親からのズレでもあることから、“ズレ感”も対の概念として取り上げるようになっていったのだが、その頃からさらに研究が拡大・深化していったように受け止めている。その一つを上げるとすれば、上位の対概念として「似よることとズレること」を誕生させたことであろう。人は、親子の似より感（ズレ感）を土台としながら、その後のその人なりの対人関係における適性距離

(Proper Distance) を身につけていく。この身につけていく適性距離と深いかかわりをもつであろう概念として「似よることとズレること」を立ち上げてみたのである。2000年の論文では、少々粗いものではあったが、人生を3つの段階に分けてこの上位概念を用いて私が〈私〉になりさらに《私》に化していく一つの理論モデルを構築してみた。今後この研究がどのように進展していくかの見通しは、まだ論文化にはいたっていないものが多いのだが、すでに学会発表の蓄積があり、かなりはっきりと立ち上げるところまできている。

親子の似より感研究は、心内化プロセスと継承化プロセスの2つの面から追究できるのであるが、残念なことに縦断的な研究によってこれらを確認することはもう不可能となってきた。しかし、青年期にある女子学生の心内化の形、幼児をもつ若い母親の継承化の形と女子学生をもつ母親のそれについては横断的調査ではあるがかなり詳細に押さえることができた。さらに、2000年と2001年の1月の最新の調査では、父親の継承化の形をも見比べることができる。親子の似より感の高い人は、心内化させた親子の似よりをベースにしてどのような人生を過ごしていくのであろうか。また、親子の似より感が低い（つまりズレを大きく感じている）人は、どのような人達を自分の内なる他者と化し、それを自己の支えとして人生を紡いでいくのだろうか。これからも生涯発達・人生周期の発達の中に位置づけながら、裾野の広い研究にしていきたいものである。これらは、青年期から壮年期までの女性の似より感の推移を追究する、理論モデルの人生の第②段階から人生の第③段階にかけての自己形成のあり方を押さえる研究になる。

筆者にはもう一つの研究課題がある。それは、人生第③段階の壮年期から老年期にかけての自己のあり方について、この一年の間に学び取れたものを理論モデルの中に付け加える形で紹介していくというものである。Maslow, A.H. に始まり Frankl, V.E., Rogers, C.R. を経て Wilber, K. に至るトランスパーソナルな世界への歩みを記すことである。また、これは禅の十牛図の第8図から第10図との対比を試みることでもある。この研究課題における論の進め方は、人生の第③段階における《私》のあり様をさらに分化させることにあり、老年期の受け止め方に新たなプラスの光をあてることにも通じていくのではないかと考えている。

本研究の目的

① 人生の第②段階の研究：2つの調査による女子学生の似より感3群の比較研究

時間軸からみた自己の定位（自己形成）と空間軸からみた自己の定位（自己意識）を交差させながら自己把握の違いをみていく。

② 人生の第③段階の研究：梶田（1998）のアイデンティティ研究がたどり着いたところの脱identity段階、超identity段階の捉え方を、Frankl, V.E. のロゴセラピーと禅の十牛図から解きあかす。他者とのかかわりから出発した「私→〈私〉そして《私》」が、自己を離れついでにはそれをも突き抜けて Wilber, K. の解説するトランスパーソナルな世界へと導かれていくその道筋を、構築した理論モデルの中に取り込みながらまとめ挙げてみる。

方 法

調査 I 対象者 女子学生 348 名のうち2つの調査に協力してくれた 299 名を分析の対象者とした。

実施年月 1989年12月、1990年12月、1992年12月と1993年12月の青年心理学の講義の時間に実施した。

調査内容 [調査1] 4つの人格認知因子（42項目）とその他14項目で構成されている性格

時間軸と空間軸からみた自己の定位

調査を使用した。評定の対象は、「自分自身」「母親」と「父親」である。同じ56項目の調査用紙を評定対象ごとに頁をめくりながらチェックしてもらうものである。各項目は5段階で評定された。

F1. 内向性 (12項目) : しょげやすい 臆病な 感傷的な 意志の弱い 甘えた ロマンチックな 行動力のある (-) 他人を気にする 指導力のある (-) スケールの大きな (-) 内気な 服従的な

F2. 自己顕示性 (9項目) : 利己的・自己中心的な 支配欲の強い 強がり うぬぼれの強い わがままな ひねくれた 頑固な 虚栄心の強い 粗暴な

F3. 誠実性 (14項目) : 礼儀正しい ねばり強い 几帳面な ひたむきな ものを深く考える 包容力のある 正義感の強い 献身的な 親切な やさしい なげやりなところのある (-) 無責任な (-) あきっぱい (-) 調和のとれた

F4. 明朗性 (7項目) : 明るい ユーモアのある 友人の多い さっぱりした 冒険好きな 未来に大きな希望をもつ 孤独な (-)

その他 (14項目) : しつと深い (F1/F2) 不安定な (F1/F2) 神経質な 疑い深い 理想主義的な ヒステリックな 趣味の広い 生き甲斐を感じずる 素直な ニヒルな 体の強い 独立心の強い 宗教的な 古いものの考え方をする

[調査2] 加藤 (1983) の同一性ステイタス抽出用の12項目と、梶田 (1988) の自己評価的意識30項目のうち23項目 (3因子とその他) をランダムに配置したものである (6件法)。

データの処理 [1]「親子の似より感」3群の抽出：今回は、因子を構成する42項目で群の抽出を試みた。まずは、5段階の評定を3段階に簡素化させる。非常にそう思うとそう思うを「はい」、そう思わないとまったくそう思わないを「いいえ」とし、どちらともいえない(?)を外して、「はい」と「いいえ」で回答された項目をFig.1の7区分表示図の中に入れていく。その区分③に収まった項目数で3群は分けられている。このように「親子の“似より感”」は、操作的に定義されたものなのである。[2]「自己形成」(時間軸からみた自己の定位)：加藤の12項目を3つの時期に分け、①過去の危機 ②現在の自己投入 ③将来の自己投入の希求ごとに得点を出していく (4-24点)。「自己意識」(空間軸からみた自己の定位)：梶田の30項目は2件法で計算されていたのだが、6件法に変更した。因子分析をし直した(菅野の卒論1989)結果、3つの因子が抽出された。F1自己受容 (8項目) F2自己防衛 (6項目)、F3他者受容 (3項目) ごとに1.0~6.0の得点化がなされた。

調査Ⅱ 対象者 女子学生157名。

調査期日 1994年12月と1995年12月に実施した。

調査内容 [調査3] 4つの人格認知因子 (42項目) とその他よりなる48項目の性格調査である。その他の項目は、6項目に削減している。評定対象は、調査Ⅰと同じ「自分」「母親」「父親」。5件法で回答してもらった。

[調査4] 時間軸からみた自己の定位 (自己形成) がどのように受け止められているかを調べるものである。遠藤ら (1981) が作成した38項目を使用することにした。発達段階Ⅰ期12項目、Ⅱ期6項目、Ⅳ期11項目とⅤ期9項目で構成されている (5件法)。これは、Erikson, E.H. の発達「課題/危機」に基づいたものである。Ⅲ期、Ⅵ~Ⅷ期をみる彼らの項目は数があまりにも少ないため今回の調査では除外した。Ⅴ期については、現実の自分だけでなく、こうあり

たいと思う自分についても評定してもらった。この調査では、得点が高くなるほど発達課題を身につけていると認知していることになる。逆に、得点が低くなるほど発達の課題はまだ危機の状況にあると見なす。

データの処理 [調査3] は調査Iと同じである。[調査4] 4つの時期の発達「課題/危機」の得点の幅は、5.00~1.00とした。

結果と考察

調査Iの結果は、少々粗っぽい方法ではあるが、時間軸からみた自己の定位（自己形成）と空間軸からみた自己の定位（自己意識）との関係性をみるものである。親子の似より感3群の比較は、8×8のマトリックス表（4×4のマトリックス表）を使って検討することにした。

Iの1. 3群の抽出について

自分と両親について三者別々に回答されたデータは、一括して処理すると Fig.1 のように7区分のいずれかに納まる。この区分③に入った項目数に注目して取り出されたのが、親子の似より感3群である（大群：35-16個，中群：15-7個，小群6-0個）。各群の人数は、大群 83名（27.8%），中群 140名（46.8%），小群 76名（25.4%）である。

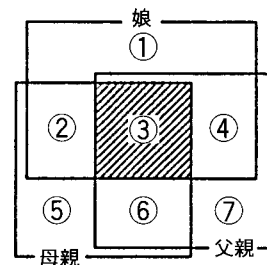


Fig.1 七区分表示図

Iの2. 自己形成と自己意識の平均とSDについて

Tab.1 は時間軸からみた自己の定位（自己形成）と空間軸からみた自己の定位（自己意識）の平均とSDである。この各々の平均値を基準にして \bar{X} 以上を H（自己形成）・h（自己意識），未満を L（自己形成）・l（自己意識）として大雑把に似より感3群の特徴を捉えていくのが、今回のHL分析である。

Tab.1 自己形成と自己意識の平均とSD

| 自己形成 | \bar{X} | SD | 自己意識 | \bar{X} | SD |
|--------------|-----------|-----|---------|-----------|------|
| ① 過去の危機 | 16.7 | 3.1 | F1 自己受容 | 2.90 | 0.98 |
| ② 現在の自己投入 | 15.1 | 3.7 | F2 自己防衛 | 4.05 | 0.73 |
| ③ 将来の自己投入の希求 | 16.0 | 2.8 | F3 他者受容 | 3.78 | 0.79 |

自己形成の結果：①過去の危機では、ほぼ半々の出現で3群間に差はみられなかった。②現在の自己投入においては、はっきりとした差があった。大群はHが63.9%，中群半々，小群ではLが72.4%となった。③将来の自己投入の希求においては、大群にのみ差（H:L=7:3）が出ており、他の2群ではほぼ半数の出現である。

自己意識の結果：F1自己受容での群間差は、hでみると大:中:小=69.9:49.2:39.5%となり、大群は小群の1.8倍の出現となった。F2自己防衛においては、3群ともほぼ半数の出現（大群はh:l=4:6である）。最後のF3他者受容は、F1と同じくはっきりとした群差があった。hでみると大:中:小=65.1:50.0:32.9%。

②現在の自己投入とF1自己受容を組合せて群差をみると、Hhは大:中:小=44.6:22.1:18.4，Llでは大:中:小=10.8:30.0:51.3となった。Hlの組合せでは大と中群が2割の出

時間軸と空間軸からみた自己の定位

現に対し小群は9.2%と少ない出現ではあるが差をみせた。Lh は21~27%と3群ともに2割台であった。②現在の自己投入とF2自己防衛の組合せでは、HI で大：中：小=39.8：23.6：18.4(大は小の2.2倍の出現)。Lh の組合せでは、大：中：小=15.7：29.3：42.1となり、逆

に小群の出方は大群の2.7倍の多さであった。Hh は HI の方に(24.1：19.3：9.2)、Ll は Lh に似た出方であった(20.5：27.9：30.3)。①過去の危機とF1自己受容・F2自己防衛の組合せにおいては、Llh(大：中：小=3.6：13.6：19.7)、Hlh(12.0：16.4：21.1)の他はほとんどおなじ割合の出現となっている。

Tab.2は、HL分析を用いた場合にできる自己形成を8つの組合せごとに①から③の平均得点とSDを示したものである。得点の分布は、4~24点である。

Tab.3は、自己意識別にみた3群の自己形成(6パターン)の平均とSDである。F1自己受容をみると、群間における差はLLL(大群>中群)小群)以外では出ない。しかしながら、自己形成のあり方によって

Tab.2 自己形成を構成する三要因の平均とSD

| 自己形成 | | ① | ② | ③ |
|-------------|-----------------|-------------|-------------|-------------|
| | | 過去の危機 | 現在の自己投入 | 将来の自己投入の希求 |
| HHH | \bar{X} SD | 19.5 2.0 | 18.9 2.2 | 18.5 1.9 |
| HHL | \bar{X} SD | 18.6 2.3 | 17.7 2.6 | 14.2 0.8 |
| HLH | \bar{X} SD | 18.9 1.7 | 13.3 1.8 | 17.8 1.9 |
| HLL | \bar{X} SD | 18.7 1.7 | 11.5 2.8 | 13.3 1.4 |
| LHH | \bar{X} SD | 14.2 1.9 | 18.1 1.9 | 17.5 1.5 |
| LHL | \bar{X} SD | 13.6 2.2 | 16.5 0.9 | 14.0 1.6 |
| LLH | \bar{X} SD | 14.5 1.5 | 13.1 1.9 | 16.7 0.9 |
| LLL | \bar{X} SD | 13.9 2.0 | 12.0 2.3 | 13.1 1.6 |
| TOTAL N=348 | | 16.7 3.1 | 15.1 3.7 | 16.0 2.8 |

Tab.3 3つの自己意識別にみた三群の自己形成(6パターン) —平均とSD—

自己意識

F1 自己受容

| | LHH | | HHH | | LLH | | HLH | | LLL | | HLL | |
|---|-----|--------------|-----|--------------|-----|--------------|-----|--------------|-----------|--------------|-----|--------------|
| 大 | 21 | 3.47 0.71 | 23 | 3.02 0.75 | 8 | 3.04 0.64 | 8 | 2.74 0.68 | 7 | 3.38 0.34 | 7 | 2.75 0.61 |
| 中 | 12 | 3.32 0.62 | 37 | 2.84 0.74 | 11 | 2.75 0.45 | 17 | 2.59 0.59 | 38 | 2.91 0.39 | 14 | 2.34 0.81 |
| 小 | 6 | 3.48 0.57 | 11 | 3.28 0.94 | 14 | 2.74 0.66 | 13 | 2.22 0.39 | 19 | 2.32 0.58 | 9 | 2.52 0.86 |
| | | | | | | | | | \bar{X} | 2.90 | SD | 0.98 |

自己意識

F2 自己防衛

| | LHH | | HHH | | LLH | | HLH | | LLL | | HLL | |
|---|-----|--------------|-----|--------------|-----|--------------|-----|--------------|-----------|--------------|-----|--------------|
| 大 | 21 | 3.86 0.70 | 23 | 3.99 0.76 | 8 | 4.15 0.58 | 8 | 4.25 0.74 | 7 | 3.55 0.38 | 7 | 4.29 0.71 |
| 中 | 12 | 3.97 0.64 | 37 | 4.03 0.93 | 11 | 4.00 0.64 | 17 | 4.00 0.75 | 38 | 4.10 0.74 | 14 | 4.00 0.77 |
| 小 | 6 | 3.92 0.55 | 11 | 3.86 0.90 | 14 | 4.01 0.51 | 13 | 4.54 0.48 | 19 | 4.25 0.54 | 9 | 4.00 0.74 |
| | | | | | | | | | \bar{X} | 4.05 | SD | 0.73 |

自己意識

F3 他者受容

| | LHH | | HHH | | LLH | | HLH | | LLL | | HLL | |
|---|-----|--------------|-----|--------------|-----|--------------|-----|--------------|-----------|--------------|-----|--------------|
| 大 | 21 | 4.32 0.69 | 23 | 4.22 0.59 | 8 | 3.92 0.74 | 8 | 4.00 0.81 | 7 | 3.81 0.24 | 7 | 3.67 0.56 |
| 中 | 12 | 3.83 0.57 | 37 | 3.82 1.06 | 11 | 3.73 0.34 | 17 | 3.81 0.53 | 38 | 3.77 0.63 | 14 | 3.43 0.85 |
| 小 | 6 | 3.94 0.59 | 11 | 3.82 0.46 | 14 | 3.74 0.83 | 13 | 3.31 0.65 | 19 | 3.14 0.75 | 9 | 3.11 1.14 |
| | | | | | | | | | \bar{X} | 3.78 | SD | 0.79 |

得点にはっきりとした差がみられている。LHH は群に関係なく高得点を出しているのに対して HLH や HLL の得点は低い。過去に危機を体験し、現在は自己投入をしていないと認知した人達であるが、空間軸からみた自己の定位の中の F1 自己受容のあり方と密接にかかわっている。F2 自己防衛でも LLL においては3群に差がでてくる。過去に危機はなく現在も将来も自己投入はしていないと自分を見つめる学生の中で、大群の自己防衛の低さが目につく。防衛の最高得点は、小群の HLH であった。

F3 他者受容では、LHH と HHH という自己形成のプラスの認知者では群に関係なく総じて高い得点を出している。HLH, LLL と HLL という認知をした小群の者は、低い得点をみせている。現在自己投入をしていないと自己をみているこれら小群の人達は、他者に目を向けることが少ないと言えるのだろうか。自己投入はしたが過去の危機は少なかったとみている LLH 者の得点は平均に近かった。

1の3. 自己形成と自己意識の HL 分析 (8×8マトリックス)

Tab.4 は、時間軸からみた自己の定位(自己形成)と空間軸からみた自己の定位(自己意識)を8×8のマトリックス表にしてみたものである。各々の平均値をベースにして、それ以上を H.h, X 未満を L.l としてかなり粗い分析ではあるが、親子の似より感3群の出方(傾向)を大雑把に捉えてみたものである(いわゆる HL 分析)。自己形成(①過去の危機 ②現在の自己投入 ③将来の自己投入の希求)も、自己意識(F1 自己受容 F2 自己防衛 F3 他者受容)も3つの要素で成り立っているのだから、その組合せは各々8通りとなり、8×8のマトリックスでクロス集計ができる。64のマスができるが、8名以上マスの中に入っていたのは14マス(人数

Tab.4 自己形成と自己意識の HL 分析 (8×8のマトリックス)

[単位] 人数と出現率

| F1 F2 F3 | | 大 中 小 | | HHH | HHL | HLH | HLL | LHH | LHL | LLH | LLL | 大 中 小 | | | | | | | |
|------------------|-------|-------------|------|---------|-------|-------|-------|---------|-------|-------|-------|-------------|------|------|---|---|---|----|---|
| | | | | 23 27.7 | 3 3.6 | 8 9.6 | 7 8.4 | 21 25.3 | 6 7.2 | 8 9.6 | 7 8.4 | | | | | | | | |
| 自 己 意 識 | (hhh) | 大 | 14 | 16.9 | 3 | 1 | 2 | | 5 | 0 | 2 | 1 | 26 | 8.7 | | | | | |
| | | 中 | 9 | 6.4 | 2 | 0 | 2 | | 1 | 0 | 0 | 4 | | | | | | | |
| | | 小 | 3 | 4.0 | 1 | 6 | 0 | 1 | 0 | 0 | 6 | 1 | | | 3 | 5 | | | |
| | (hhl) | 大 | 6 | 7.2 | 0 | | 1 | 1 | 2 | 1 | 1 | 0 | 28 | 9.4 | | | | | |
| | | 中 | 17 | 12.1 | 3 | | 2 | 1 | 2 | 0 | 1 | 8 | | | | | | | |
| | | 小 | 5 | 6.6 | 0 | 3 | 0 | 0 | 2 | 2 | 6 | 0 | | | 1 | 9 | | | |
| | (hlh) | 大 | 24 | 28.9 | 7 | 1 | 1 | 2 | 8 | 2 | 2 | 1 | 67 | 22.4 | | | | | |
| | | 中 | 30 | 21.4 | 8 | 1 | 2 | 1 | 5 | 2 | 3 | 8 | | | | | | | |
| | | 小 | 13 | 17.1 | 5 | 20 | 0 | 2 | 0 | 3 | 2 | 5 | | | 2 | 7 | 1 | 10 | |
| | (hll) | 大 | 14 | 16.9 | 2 | 1 | 1 | 0 | 2 | 2 | 1 | 5 | 36 | 12.0 | | | | | |
| | | 中 | 13 | 9.3 | 6 | 0 | 1 | 2 | 1 | 0 | 1 | 2 | | | | | | | |
| | | 小 | 9 | 11.8 | 1 | 9 | 1 | 2 | 1 | 3 | 0 | 2 | | | 0 | 3 | 0 | 2 | 4 |
| | (lhh) | 大 | 9 | 10.8 | 5 | | 1 | 1 | 1 | 0 | 1 | 0 | 34 | 11.4 | | | | | |
| | | 中 | 18 | 12.9 | 6 | | 2 | 2 | 1 | 1 | 1 | 5 | | | | | | | |
| 小 | | 7 | 9.2 | 0 | 11 | 0 | 4 | 7 | 0 | 3 | 0 | 2 | | | 0 | 1 | 2 | 4 | 1 |
| (lhl) | 大 | 4 | 4.8 | 1 | 0 | 1 | 1 | 1 | 0 | 0 | 0 | 52 | 17.4 | | | | | | |
| | 中 | 24 | 17.1 | 6 | 2 | 2 | 3 | 2 | 1 | 2 | 6 | | | | | | | | |
| | 小 | 24 | 31.6 | 2 | 9 | 0 | 2 | 6 | 9 | 4 | 8 | | | 1 | 4 | 0 | 1 | 2 | 4 |
| (llh) | 大 | 7 | 8.4 | 5 | 0 | 1 | 0 | 0 | 1 | 0 | 0 | 22 | 7.4 | | | | | | |
| | 中 | 13 | 9.3 | 3 | 1 | 3 | 1 | 0 | 1 | 2 | 2 | | | | | | | | |
| | 小 | 2 | 2.6 | 0 | 8 | 1 | 2 | 0 | 4 | 0 | 1 | | | 1 | 1 | 0 | 2 | 0 | 2 |
| (lll) | 大 | 5 | 6.0 | 0 | 0 | 0 | 2 | 2 | 0 | 1 | 0 | 34 | 11.4 | | | | | | |
| | 中 | 16 | 11.4 | 3 | 1 | 3 | 4 | 0 | 1 | 1 | 3 | | | | | | | | |
| | 小 | 13 | 17.1 | 2 | 5 | 0 | 1 | 2 | 5 | 3 | 9 | | | 0 | 2 | 0 | 1 | 1 | 3 |
| | | | | 71 | 10 | 38 | 30 | 39 | 14 | 33 | 64 | 299 | 大 83 | | | | | | |
| | | | | 23.8 | 3.3 | 12.7 | 10.0 | 13.0 | 4.7 | 11.0 | 21.4 | 140 | 中 76 | | | | | | |
| | | | | | | | | | | | | | 小 76 | | | | | | |

自 己 形 成

時間軸と空間軸からみた自己の定位

149名 49.8%)であった。半数の人数を22%のマスで占めていることになる。各々のマスの中での3群の出方をみると、群の特徴、群を構成する人達の自己把握の仕方の違いをえる事ができる。

1) 自己形成のHHHと自己意識のhllは、3群とも約15-30%の出現率をみせた。

2) 大群の自己形成は、HHHとLHHで53.0%の出現である。過去の危機の多少にかかわらず、現在と将来を前向き(プラス)に受け止めている人が半数存在していることを示している。これは、自己意識のF1とF3のhの多さでも裏付けられている。

3) これに対し、小群は、出方が複雑である。自己形成の①②③ともHとLの出現率は半々だが、これを組み合わせると8つ(上段の総計)のうち5つのマスで、10%以上の出現をみせた。中でもLLLの25.0%(小群全体の1/4)が目をはく。大群の約3倍の出現となっており、過去の危機は少ないが現在・将来とも自己投入の意識が低い認知者達である。小群の自己意識では、hllが31.5%を占め(大群の6倍強)、自己・他者受容の低い不安定な自己認知がうかがえる。

Iの4. 4×4のマトリックスで捉えなおすと

64のマスに299名を入れこむ作業は、残りの半数の存在者が7人以下で50のマスに分散してしまう。そこで、③将来の自己投入の希求とF3他者受容を削除して4×4のマトリックスでみることにしたい。これで親子の似より感3群をみていくなれば、16の領域(マス)で見比べることができ、過去と現在・自己受容と自己防衛のかかわり方が分かる(Tab.5)。

3群ともかなり高い出現率をみせたのは、領域5と8である。自己意識はhl:自己受容は高く自己防衛は低い。しかし、自己形成においては、HHとLLである。まったく反対のペアになっているところに興味をひかれるが、双方合わせても20%位の出現である。大群の出現の

Tab.5 4×4のマトリックスでみた親子の似より感3群のHL分析

| ①② | | 時間軸からみた自己の定位 (自己形成) | | | | ①過去の危機 ②現在の自己投入 |
|---------------------|--|---|--|--|----------------------------------|---|
| | | HH | LH | HL | LL | |
| 空間軸からみた自己の定位 (自己意識) | hh | 1 大 4 中 5 小 1 10 | 2 大 8 中 3 小 3 14 | 3 大 4 中 5 小 0 9 | 4 大 4 中 13 小 4 21 | 大 20 24.1% 中 26 18.6 小 8 10.5 2.3倍 54 |
| | hl | 5 大 11 中 15 小 7 33 | 6 大 14 中 8 小 3 25 | 7 大 4 中 6 小 3 13 | 8 大 9 中 14 小 9 32 | 大 38 45.8% 中 43 30.7 小 22 28.9 1.6倍 103 |
| | lh | 9 大 6 中 14 小 2 22 | 10 大 2 中 5 小 1 8 | 11 大 4 中 9 小 14 27 | 12 大 1 中 14 小 14 29 | 大 13 15.7% 中 42 30.0 小 31 40.8 2.6倍 86 |
| | ll | 13 大 5 中 8 小 3 16 | 14 大 3 中 2 小 1 6 | 15 大 3 中 11 小 5 19 | 16 大 1 中 8 小 6 15 | 大 12 14.5% 中 29 20.7 小 15 19.7 56 |
| F1 自己受容 | 大 26 31.3% 中 42 30.0 小 13 17.1 81 | 大 27 32.5% 中 18 12.9 小 8 10.5 53 | 大 15 18.1% 中 31 22.2 小 22 28.9 68 | 大 15 18.1% 中 49 35.0 小 33 43.4 97 | N=299 (大 83 中 140 小 76) | |

多い領域は、領域 6, 2 と 9 で合わせると 33.7% (小群では, 10.4% 中群 17.8%)。逆に, 小群の方が多い出現は, 領域 12, 11 と 16 で合わせると 44.7% (大群 7.2% 中群 22.1%) であった。大群は過去の危機にあまり関係なく現在の自己投入の高い者が多く (HH では小群と比べて 1.83 倍 LH では 3.10 倍), 小群ではその反対に低い者が多い (大群に比べ LL では 2.40 倍 HL で 1.60 倍) という結果であった。空間軸からみた自己の定位 (自己意識) では, II の人達 (自己受容も自己防衛も低得点者) は, 3 群で大きな差はなく 15%~20% の出現である。これに対し, hl では小群に比べて大群は 1.58 倍, hh では 2.30 倍の出現となり, 自己受容が高い群は大群 (69.9% 2/3) といえる。lh (自己受容は低く自己防衛が高い) では, 小群が大群に比べて 2.60 倍という出方であった (大群 3/20 小群 4 割)。

時間軸からみた自己の定位 (自己形成) と空間軸からみた自己の定位 (自己意識) を交差させて捉えてみるという今回のアプローチは, 親子の似より感 3 群の自己認知のあり方の違いを浮き彫りにしてくれ, これまでの追跡研究をさらに裏付けてくれるものであった。

ここからは, 日を改めて実施した調査 II の結果を見ていきたい。この調査のねらいは, Erikson, E.H. の理論をもとに作成された遠藤らの調査項目を精選し, 時間軸からみた自己の定位 (自己形成) の様子を見ることにある。女子学生達は, 過去の発達「課題/危機」を今の時点でどのように認知しているのだろうか。3 群の認知の仕方について分析を試みてみたい。

II の 1. 親子の似より感 3 群の抽出

七区分表示図の区分③に入った項目数と (人数) は, 大群: 27~14 コ (42), 13~6 コ (76), 小群: 5~0 コ (39) となり, 従来通りの出現であった。

II の 2. 4 つの発達段階における発達「課題/危機」の現れ方について

(1) Tab.6 は, 親子の似より感 3 群と全体の平均得点と SD を示したものである。一要因分散分析と多重比較 (テューキ法 $P < .05$) の結果, どの発達「課題/危機」においても大群の学生が中・小群と比べて有意に高得点となった。発達段階 I・II・IV・V 期の課題のいずれの受け止め方も, 大群の学生の方がよりプラス指向なのである。

Tab.6 似より感 3 群の各発達「課題/危機」の平均得点と (SD)

| 群 | 発達の課題 / 危機 | 基本的信頼感 対 不信感 | 自 律 性 対 恥・疑惑 | 生 産 性 対 劣 等 感 | 自我同一性 対 拡散 |
|----------|-------------------|--------------------|--------------------------|---------------------------------|------------------|
| 全 体 | \bar{X} (SD) | 3.72 (0.49) | 3.12 (0.55) | 3.54 (0.49) | 3.10 (0.59) |
| 大 群 | \bar{X} (SD) | 4.02 (0.33) | 3.34 (0.57) | 3.83 (0.40) | 3.34 (0.53) |
| 中 群 | \bar{X} (SD) | 3.65 (0.49) | 3.07 (0.47) | 3.53 (0.40) | 3.03 (0.56) |
| 小 群 | \bar{X} (SD) | 3.46 (0.72) | 2.97 (0.76) | 3.31 (0.77) | 2.87 (0.86) |
| 一要因分散分析 | | $P < .001$ | $P < .05$ | $P < .001$ | $P < .01$ |
| 大群 vs 中群 | | * | * | * | * |
| 大群 vs 小群 | | * | * | * | * |
| 中群 vs 小群 | | - | - | - | - |

時間軸と空間軸からみた自己の定位

(2) Tab.7 は、I・II・IV・V期の発達「課題／危機」ごとに \bar{X} 以上の得点を出したものをH、 \bar{X} 未満のものをLとして人数を%でみたものである。I期の基本的信頼感対不信感とII期の自律性対恥・疑惑では、大群と小群の出現率がHとLで逆になっていることが分かる。IV期とV期では、大群のみHの方に偏り、中・小群は半数づつになっている。

次に、このI・II・IV期を $2 \times 2 \times 2$ の組合せにして3群の現れ方をみたのが Tab.8 である。全体をみると、HHHとLLLだけで50.9%の人数が納まっている。この特徴は、中群において維持されているが、大群はHHHの方へ(47.6%)、逆に、小群はLLLの方へ引き寄せられていく(38.5%)。「基本的信頼感対不信感」は、 \bar{X} 以上の得点を出した者が大群では88.1%もあり、他の2群を大きく引き離している(中群43.4%/小群35.9%)。

Tab.7 I・II・IV・V期の発達「課題／危機」ごとのHL分析

(単位 出現%)

| 似より感群 | 課題 対 危機 | | | | |
|---------|---------------|--------------------|------------------|-----------------|------------------|
| | | 基本的信頼感 対 不信感 | 自律性 対 恥・疑惑 | 生産性 対 劣等感 | 自我同一性 対 拡散 |
| 大 42 | H | 88.1 | 66.7 | 69.0 | 78.6 |
| | L | 11.9 | 33.4 | 31.0 | 21.4 |
| 中 76 | H | 42.1 | 50.0 | 57.9 | 53.9 |
| | L | 57.9 | 50.0 | 41.1 | 46.1 |
| 小 39 | H | 35.9 | 38.4 | 46.2 | 46.1 |
| | L | 64.1 | 61.5 | 53.8 | 53.8 |

註 Hの中の数：+1SD以上の人数，Lの中の数：-1SD以下の人数

Tab.8 発達「課題／危機」I・II&IV期を組み合わせたHL分析

単位 % (人数)

| 基本的信頼感 対 不信感 | 自律性 対 恥・疑惑 | 生産性 対 劣等感 | 似より感 | | | 全 体 |
|--------------------|------------------|-----------------|--------------|--------------|--------------|--------------|
| | | | 大 群 | 中 群 | 小 群 | |
| H | H | H | 47.6 (20) | 22.4 (17) | 17.9 (7) | 28.0 (44) |
| | | L | 16.7 (7) | 2.6 (2) | 2.6 (1) | 6.4 (10) |
| | L | H | 19.0 (8) | 11.8 (9) | 10.3 (4) | 13.4 (21) |
| | | L | 4.8 (2) | 6.6 (5) | 5.1 (2) | 5.7 (9) |
| L | H | H | 0.0 (0) | 15.8 (12) | 10.3 (4) | 10.2 (16) |
| | | L | 2.4 (1) | 9.2 (7) | 7.7 (3) | 7.0 (11) |
| | L | H | 2.4 (1) | 7.9 (6) | 7.7 (3) | 6.4 (10) |
| | | L | 7.1 (3) | 23.7 (18) | 38.5 (15) | 22.9 (36) |

(3) Tab.9 は、発達段階Ⅰ期とⅤ期のHL分析である。ここでも似より感大群のプラス指向が際だっている(HH 71.4%)。これに対し、小群ではLLという自己認知者が半数いることが特徴である。しかし、この小群には、HHの認知者も3割存在することを考え合わせると、この群の学生の多様性には今後しっかりと目を向けていく必要があるといえる。また、いつも置き去りにされがちな中群の存在もないがしろにされてはいけないであろう。全体の出方に類似するこの群の詳細なる分析の中にもそもっと新しい発見があるかもしれない。心しておきたい。

Tab.9 発達「課題／危機」のⅠ期対Ⅴ期のHL分析 単位 % (人数)

| 基本的信頼感 対 不信感 | 自我同一性 対 拡散 | 似より感 | 似より感 | 似より感 | 全 体 |
|--------------------|------------------|--------------|--------------|--------------|--------------|
| | | 大 群 | 中 群 | 小 群 | |
| H | H | 71.4 (30) | 30.3 (23) | 30.8 (12) | 41.4 (65) |
| | L | 16.7 (7) | 13.2 (10) | 5.1 (2) | 12.1 (19) |
| L | H | 7.1 (3) | 22.4 (17) | 15.4 (6) | 16.6 (26) |
| | L | 4.8 (2) | 34.2 (26) | 48.7 (19) | 29.9 (47) |
| \bar{X} 3.72 | 3.10 | (42) | (76) | (39) | (157) |
| SD 0.49 | 0.59 | | | | |

Ⅱの3. 発達段階Ⅴ期の発達「課題／危機」の自我同一性対拡散について

Ⅴ期については、現状の自分だけでなくこうありたいという自分についても評定してもらった。Tab.10 は、現実の自分の得点を4つに分け、こうありたいと思う自分と現実の自分の差

Tab.10 こうありたいと思う自分と現実の自分の差の出方

| 現実の自分 | (こうありたいと思う自分—現実の自分)の差 | | | | | | 備 考 |
|--|------------------------|---|------------------------|---|------------------------|--|---|
| | 大 | | 中 | | 小 | | |
| +1SD 以上 (3.69以上) | n=10 \bar{X} 0.55 | 0.11~0.45 8 0.50~0.89 8 1.00 1 | n=6 \bar{X} 0.45 | 0.11~0.45 4 0.56 1 1.00 1 | n=1 | 0.56 1 | |
| +1SD 未満 ~ \bar{X} (3.68 ~3.10) | n=23 \bar{X} 1.08 | 0.44 1 0.55~0.89 8 1.00~1.45 11 1.56 2 1.67 1 | n=35 \bar{X} 0.83 | 0.00 3 0.22 1 0.56~0.89 16 1.00~1.33 14 1.78 1 | n=17 \bar{X} 0.86 | *-0.45 1 0.22~0.45 3 0.56~0.88 5 1.00~1.45 6 1.67 2 | 現 理 I II IV V V * ₂ 3.33 3.33 4.09 3.56 3.11 |
| \bar{X} 未満 ~-1SD (3.09 ~2.52) | n=6 \bar{X} 1.22 | 1.00~1.33 5 1.66 1 | n=22 \bar{X} 1.28 | 0.56~0.89 7 1.00~1.44 6 1.55~1.89 8 2.11 1 | n=11 \bar{X} 1.33 | 0.78~0.90 3 1.11~1.33 5 1.89 1 2.00 1 2.22 1 | |
| -1SD 以下 (2.51以下) | n=3 \bar{X} 2.04 | 1.67 1 2.00 1 2.45 1 | n=13 \bar{X} 2.05 | 1.33 1 1.56~1.89 6 2.00~2.44 4 2.55 1 * ₂ 3.45 1 | n=10 \bar{X} 1.87 | 0.34 1 1.11~1.45 3 1.67~1.89 3 2.45 1 * ₃ 3.00 1 * ₄ 3.56 1 | 現 理 I II IV V V * ₂ 1.83 2.50 2.45 1.44 4.89 * ₃ 4.50 3.67 3.55 1.22 4.78 * ₄ 2.25 2.67 2.36 1.44 4.44 |

時間軸と空間軸からみた自己の定位

がどれくらいあるのかを3群別にみたものである。現実の自分が平均値以下に低く位置づけられた者ほどその差は大きくなっていく。差が大きい人の自己の有り具合は備考欄の学生の結果をみると、総じてその自己認知の“しんどさ”が透けてみえてくる。この現実と理想の差の受け止め方も大切な自己を見つめる要因である。その人にとっての適切なズレの問題がそこには存在する。ここでの比較で分かったことは、現状の自分で-1SD以下(2.51)の得点者(26名)が、こうありたいという自分ではかなりの得点上昇を呈していた(大 \bar{X} 2.04/中 \bar{X} 2.05/小 \bar{X} 1.87)。

現実と理想におけるズレ(溝)は、かなりなものである。Tab.11は、V期の現実と理想の差が1.50以上の人40名のI・II・IVとV期の関係をHL分析でみたものである。本来ならば32通りの組合せが存在するのであるが、ここでは16通りの中に納まっている。4つの発達段階のすべてでLとなったLLL者で、理想の自分をHにした学生が12名と多く3割を占めていた。これは、中群と小群での出現で、大群は0名であった。後は、4名がHLHLH LLHLHという2つの組合せで、3名のところは、LHLLLとLLLLであつた。全体を通してみると、中群の出現が多かったのであるが、母集団が76名なので小群の出具合いとあまり差はない。しかし、-1SD以下に12名(15.8%) \bar{X} 未満で21名(27.6%)は、小群の \bar{X} 未満で23.1%と比べても無視してはいけない問題を秘めているように思われる。

Tab.11 発達段階Vの現実と理想の自分の差が1.50以上の人(N=40)

—4つの段階における得点(H/L)のかかわり方—

| I 信頼感 対 不自信 | II 自立性 対 恥・疑惑 | IV 生産性 対 劣等感 | V 自我同一性 対 拡散 現実の 自分 理想の 自分 | | 似より感群 | | | n |
|----------------------|------------------------|-----------------------|---|---|-------|----|----|----|
| | | | 大 | 中 | 小 | | | |
| H | H | H | H | H | 1 | 0 | 1 | 2 |
| | | L | L | H | 0 | 0 | 1 | 1 |
| | L | H | H | H | 0 | 1 | 1 | 2 |
| | | L | L | H | 1 | 3 | 0 | 4 |
| | | L | L | L | 0 | 1 | 0 | 1 |
| | | L | L | H | 1 | 0 | 0 | 1 |
| L | H | H | L | H | 0 | 1 | 1 | 2 |
| | | L | L | H | 0 | 1 | 0 | 1 |
| | L | L | L | L | 0 | 2 | 1 | 3 |
| | | H | L | H | 1 | 3 | 0 | 4 |
| | | L | L | L | 0 | 0 | 1 | 1 |
| | | L | H | H | 1 | 0 | 0 | 1 |
| | L | L | H | 0 | 8 | 4 | 12 | |
| | L | L | L | 1 | 1 | 1 | 3 | |
| 計 | | | | | 7 | 22 | 11 | 40 |
| V 現実の 自分 | +1SD以上 | | | | 0 | 0 | 0 | |
| | +1SD ~ \bar{X} | | | | 3 | 1 | 2 | |
| | \bar{X} ~ -1SD | | | | 1 | 9 | 3 | |
| | -1SD以下 | | | | 3 | 12 | 6 | |

以上、時間軸からみた自己の定位（自己形成）のあり方を、2つの調査によって眺めてみたが、親子の似より感3群の特徴は、これまでの諸研究の結果をさらに確認できるものであったといえよう。心内化プロセスの形は青年期にある女性の心の中にどのように納まっているのかを追究する今回の研究方法と、継承化プロセスの形が若い母親や女子学生をもつ母親の心の中でどのように定着しているかをみる研究を並行して追究しているため、どうしてもまだ一括して文章化し世に問うことができない。焦りは禁物なのではあるが……。

人生を三段階でみる理論モデルの研究

1. 自己と他者のかかわりについて

まずは、自己と他者のかかわりについて学び取ったことを論じてみたい。人生の第①～③段階にわたって発達を遂げていく「自己」とはどのようにして認識されていくのだろうか。私が〈私〉へ、そして《私》へと心の発達が変わっていくことと、自分にとって重要な他者が〈私〉の内に取り込まれて「内なる他者」と化するという論じ方をしてきた。2000年の論文では、中村(1999)の「私の内におのれを異化する〈他者〉をかかえ込んだ私」をまずは取り上げた。これを補足・補強する形で、新たに同じ哲学者である上田(1995, 2000)の「我は、我ならずして、我なり」Ich bin, indem ich nicht ich bin, ich の考え方を手に入れることができた。「世界は虚空の中にある」という彼の論を重ね合わせると、“われは、われならずして（虚空まで通って）（そして世界に出て来て）、われである。”ということになる。

もう一つ、免疫学者の多田富雄氏の「免疫の意味論」を手元において読み解くまでにはいたっていないのだが、五木(1998)や森岡(1999)の中から知りえたものをここで述べておきたい。“免疫の体系が生きているということは、自己を決定する働きが生きているということである”（五木）。“免疫系などは、非常に複雑な細胞の構成になっていて、それぞれの細胞がお互いに情報を交換しながら、全体として動いている。”言い換えるならば“免疫系などは、いろいろな働きをもっている細胞がお互いに相互作用を起こしながら自分自身を維持しているようなシステム”と考えられている（森岡）。「自己と非自己」を自分とは何かというアイデンティティを確立する働きとみなすのが多田である。かつての免疫論は、「自己と非自己を識別し、非自己を排除して自己を確立する働き」とみなしていたようであるが、新しい免疫論では、「非自己の延長線上に自己があると考え、自己と非自己の共生の可能性を探そうとするもの」にシフトされたようである（五木）。自己と非自己の関係が、試行回数（出勤）の増加にともなって非自己に対し幅が出てくるとして、「寛容（トレランス）」というキーワードが用いられるようになってきているそうである。この許容範囲の拡大化とは、いわゆる学習心理学の用語でいえば汎化現象ということである。私が〈私〉と化していくプロセスを考えていくとき、“始めに他者ありき”が重要な要因であるということを示している。

2. 霜山(1978)の「まわりに立ちこめた雰囲気」の補充について

この概念についても、新しい知見が手に入ってきた。やはり哲学者である小川(2001)は、雰囲気の中の人間をテーマに「環境見つめる知」として、新しい現象学を紹介している。これは、「集合心性論」という一種の社会性をもつ雰囲気的性格に注目したものである。この雰囲気の内には身体をもって生きる存在者（つまり、環境の内に生きる人間）として捉えていくものらしい。環境も雰囲気の一つであり、この雰囲気は、人間を取り巻く根源的な状況であるとみなしている。「人間は状況のなかに、環境のなかに、なによりも雰囲気のなかに生きる」とい

う考え方は、これからどのように展開・発展していくものなのか注目していきたい。

3. 全体と個のテーマについて

もう一つ、『場の力』という考え方もここで取り上げておきたい。清水博氏は、生命とは何かを探究し続ける「場」の研究者として知られている。彼の考え方をもとに毎日新聞の経済観測（獣）2000.1.27.では、次のような記述がなされてあった。“人間の肉体も細胞も、どれも同じDNAの構造を持っている。しかし、それが置かれた「場」によって、その働きに見合う形を持つ。人間が生命活動を営む「場」は、それぞれの細胞が「個」であろうとする性質と、天体のように互いの引力の総和として「全体」になるという性質の双方で成り立つのだという……相対する性質を同時に持つのは、欧米的論理では矛盾だが、素粒子が「粒」であると同時に「波」であるという例もある。” 少々長い引用になったが、同じような思索が同時並行しながら進んでいるということを再確認したように思う。

4. 「その他の関係」という概念とは、どういうことを意味するのかについて

鶴見・浜田・春日・徳永（1999）は討論の中で、この「その他の関係」について触れている。高齢化社会に突入していく人間関係において、距離を置いてのつき合い、つまり、「距離感というもの」を大事にしたいというのが彼らの主張である。その他の関係は、距離を保てることと、待ち控えることを主眼とし、命をかけた関係となるのであるが、これからの日本社会は、その他の関係の力を借りることによって、はじめて老人も家族も再生の可能性が出てくるというのである（精神科医の浜田）。これは、Buber, M. のいう「運命的な出会い」と近い考え方であるらしい。その人なりに身につけてきた他者との Proper Distance（適性距離）は、その後の人生の積み上げ方次第で、ひと味もふた味も違った老人とのかかわり方をする「その他の関係」にまで到達したり、行き着くことができるということのようなのである。

5. トランスパーソナルな世界への旅立ちについて：守・破・離から脱・超へ

29年間にわたるこれまでの研究手法は、帰納的推理の積み上げであったが、2000年の論文で一つの理論モデルを構築したことにより、いよいよ演繹的推理がスタートすることになる。つまり、「似よることとズレること」という対概念で人生を紡ぐ作業に入ったということである。今後どれくらい思索に奥行きが出てくるかは、これからの取り組みに全てが託されてくる。これまで長い年月をかけて探ってきた下位概念の「親子の似より感（ズレ感）」は、この上位対概念のもとで、いろいろと検討がなされていくことになろう。人生の第②～③段階における私から〈私〉そして《私》への一人ひとりの織り上げ方とこの親子の似より感はその関係性を問われていくことになる。

人生の第②段階における自己との出会いは、まずは、思春期に入ったことからくるズレへの不安と、異端になることへの極度のためらいから始まるのではあるまいか。人生の第①段階においてはまわりから創られてきた私が、ズレることと仲間と一緒にありつづけねばという気持ちとの葛藤の中に投げ込まれる。と同時に、本人の意志に関係なく、いよいよ禅における十牛図の第1図尋牛への心の旅立ちがある。第2図見跡、第3図見牛、第4図得牛と心理的次元における自己との折り合いをつけるべく、長い時間が過ぎ去っていく。青年期も後半にさしかかると、第5図牧牛の段階に入り、早い時は第6図騎牛帰家の状況で心穏やかになる人が出るかもしれない（若い壮年期）。さて、いよいよ人生の第③段階がいつの頃からか忍び寄ってくる。第7図の忘牛存人で、うまく心理的次元の折り合いをつけたと感じた人でも、中年期危機に直

面するようなのだが、これは、人間的次元における〈私〉が他者や自分とのかかわりを再調整する時期に入ったということを意味しているのではあるまいか（すべての人がとは言えないけれど…）。危機は即発達の課題に通じているのである。その後は第8図の人牛俱忘（空一円相）から第9図返本還源を経て第10図の入塵垂手に入っていくと、東洋では古来より禅宗を中心として伝えられてきた。梶田（1998）が取り上げた、脱 identity 段階・超 identity 段階は、十牛図の第8図～第10図のことを示したものであると考えることは可能である。

この一年間は、Maslow, A.H. の至高体験から出発し、Frankl, V.E. のロゴセラピーと Rogers, C. の来談者中心療法・エンカウンターグループを経て、Wilber, K. の万物の歴史にたどり着いた。いよいよトランスパーソナルな世界への視野の拡大である。

6. Frankl, V.E. から得たものについて

Frankl, V.E. (1982/1997 訳) は人間固有の能力として、「自己超越」(人間はいつも自分自身を超えている)と「自己距離化」(人間は自分から離れることができる。自分に対向することができる)を持ちあわせているという。逆説志向の技法では、自己距離化 (Selbstdistanzierung) の能力が重要な役割を演じることを説く。人間は意味を求め、それに向かって自己超越する存在であるが、まさにこの人間の自己超越こそ、人間を人間たらしめているとみている。

Frankl, V.E. のロゴセラピーは、「自己超越性 Self-transcendence」(意味への意志)と「自己離脱性 Self-detachment」(逆説志向 paradoxical intention) という人間だけが持つ二つの能力を利用する。

彼 (1978/1999 訳) は、多様性における統一性は、人間的な次元の中でのみ存在しているという。この統一性とは、多様性の中に存在する統一性ではなく、むしろ多様性にもかかわらず存在する統一性と説く。つまり、人間の統一性 (oneness) に当てはまるものはまた人間の開放性にも当てはまるというのである。因果関係は、閉鎖系の代表であるが、人間であることは、「世界に向かって開かれた存在」として位置づけ、特徴づけている。

実存の自己超越性

- ・これは、人間が根源的な事実であるということ表現するためにある。
- ・この自己超越性という特質を人が生き抜かない限り、実存することはできない。
- ・実存の持つ自己超越的な特質、開かれた存在としての人間の側面が、一つの断面には表現されていないが、別の断面には現われないということも理解できるだろう。
- ・閉鎖系と開放系は、矛盾なく両立できる。

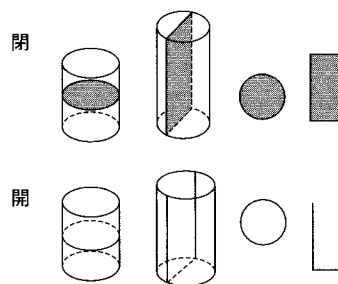


Fig.2 閉鎖系と開放系の説明図

ここで言えることは、自己を形成していくということと自己を超越していくということは、人生の中では矛盾なく両立できるということであろう。

諸富 (1997) は、Frankl, V.E. のことを詳しく紹介しているが、その中からも少し抜きだしておきたい。

- ・人生の意味は向こうからやってくるものである。人間を超えた「向こう」の次元からのメッセージが同時にあらゆる人間の足下に届けられている。
- ・精神はまさにその根源においては、無意識的な精神である。
- ・精神的無意識が「超越的でもあるもの」として開示される（無意識の精神の次元）。
- ・人が「意味」の呼びかけに呼応する時、まず無意識の深層がその呼びかけを感受し、呼応して、それそのものが決断する。そして次のこの深層レベルでの心の働きを自覚し意識化して表出していく。
- ・「呼びかけ=呼応する」働きは、それ自体で力に満ちていて、それそのもので立っている。「自己根底のいのちの働き」は、まさにこの意味で、単なる自我的主体を超えた真の主体なのである。
- ・自我をその奥に超え、その深みをどこまでも突き進んだ末にぶち当たる「底の底」=「私の底」に与えられた「いのちの働き」（絶対絶命の危機においてはじめてそれと気づかされる）がある。
- ・「生かされている自分」の発見：「自分のいのち」が「他のいのち」とつながっているという実感。
- ・「私の底のいのち」においては、自他の区別がなく、私と世界、私と宇宙はひとつである。
- ・なすべきことは私を超えた向こうから常に既に送り与えられているというのが、フランク心理学のメッセージである。

ここに至って、内へ内へと追究を進めていくうちに、いつの間にかタイムスリップして宇宙・自然という世界へ結び付いていたという実感がある。まだ完全には理解しているとはいえないが、ここで Wilber, K. の「万物の歴史」を読みながらメモしてきたことを少し取り上げながら締めに入りたい。

- ・「超えて含む」
- ・より大きな深さ、より狭い幅
- ・いわゆる混沌からの秩序
- ・進化には全体にわたる連続性がある。
- ・主体、心は、発達してきたものとしてのみ捉えうる。
- ・〈すべて〉はまわりではなく、あなたの内で展開していく。

Fig.3 は、昨年立ち上げた理論モデルに、この一年間積み上げてきた新しい課題を付記させたものである。これをベースに、これからはさらに深化に向けた努力を継続させていくつもりである。今後のもう一つの取り組みは、人生の第③段階の終着点に位置すると思われる「呆ける」という人間存在の事実と、トランスパーソナルな世界へも人間はさらに飛翔しようと考えた英知とは、どのように結び付けるべきかということである。この二つは、対極に位置づけられるものなのか、それとも、同じ方向性にあるものを別の側面から眺めてみているだけなのだろうか。現段階の筆者にとっては、まだまだ未知の領域のテーマなのである。



Fig.3 「似よることとズれること」という対概念をもとにした理論モデルの拡大と深化にむけて (その2)

最後に、これまでずっと「似より」に similarity という語を当てはめてきたことに触れておきたい。精神科医の中井 (1998) は、ウイトゲンシュタインの「家族類似性」が family resemblances (Familienähnlichkeiten) であることを記述していた。現時点では、be similar to がよいのか be alike resemble がよいのか決めかねるところであるが、記憶にはしっかりとどめておきたい。

文 献

- 秋山幹男 1974 女子学生における自己と父母の認知について 広島文教女子大学研究紀要 8 23-38
- 秋山幹男 1980 女子学生における自己と父母の認知について (2) —4年間の縦断的研究— 広島文教女子大学研究紀要 15 45-74
- 秋山幹男 1981 女子学生における自己と父母の認知について (3) —タイプ分析の試み— 広島文教女子大学研究紀要 16 61-72
- 秋山幹男・有馬道久 1985 女子学生における自己と父母の認知について (4) —因子別得点をもちいたクラスター分析の試み— 広島文教女子大学紀要 20 57-68
- 秋山幹男 1988 女子学生における自己と父母の認知について (5) —三者間の似よりもとづく分析— 広島文教女子大学紀要 23 (人文・社会科学編) 83-102

時間軸と空間軸からみた自己の定位

- 秋山幹男 1992 親子の「似より」と女子学生の性格との関連 広島文教女子大学紀要 27 67-88
- 秋山幹男 1993 親子の似よりと自己受容について—女子学生における理想自己と現実自己のズレ— 広島文教教育 7 29-48
- 秋山幹男 1994 親子の似よりの測定と自己受容の関係について 日本性格心理学会第3回大会発表論文集 41 (ラウンドテーブル2:研究者の心理学的道具概念)
- 秋山幹男 1994 「親子の似より」研究の現状とそのパースペクティブ 広島文教女子大学紀要 29 145-169
- 秋山幹男 1995 親子の似よりと家族イメージ・エゴグラム 日本性格心理学会第4回大会発表論文集 100-101
- 秋山幹男 1995 親子の似よりと自己形成・自己意識 日本心理学会第59回大会発表論文集 31
- 秋山幹男 1996 母親からみた親子(幼児)の性格と養育態度 中国四国心理学会第52回大会発表論文集 81
- 秋山幹男 1997 母親からみた親子(幼児)の性格の似よりとズレ 日本心理学会第61回大会論文集 73
- 秋山幹男 1997 若い母親の実父母との似より感が親子(幼児)の性格認知に及ぼす効果 日本性格心理学会第6回大会発表論文集 37
- 秋山幹男 1997 親子の似より(感)の推移について—女子学生を対象にした4年間— 広島文教女子大学紀要 32 149-163
- 秋山幹男 1998 成人女性のみた夫・自分・娘の性格認知—実父母との似より感をベースにした分析— 日本性格心理学会第7回大会発表論文集 78-79
- 秋山幹男 1998 成人女性(母親)の実父母との似より感について—女子学生をもつ母親の性格認知— 日本心理学会第62回大会発表論文集 37
- 秋山幹男 1998 「内なる他者」を見つめる目 広島文教女子大学紀要 33 103-117
- 秋山幹男 1999 親子の似より感と心理学的健康について 日本心理学会第63回大会発表論文集 52
- 秋山幹男 1999 母親と娘(学生)の捉えた三者間認知—「夫・自分・娘」と「父・母・自分」の似より感を中心— 日本性格心理学会第8回大会発表論文集 88-89
- 秋山幹男 1999 女子学生とその両親が捉えた性格の相互認知—似より感とズレ感をもとにした分析— 広島文教女子大学紀要 34 41-54
- 秋山幹男 2000 親子の似より感と発達「課題/危機」の受け止め方 日本心理学会第64回大会発表論文集 32
- 秋山幹男 2000 娘の捉えた自己定位と親子の間の似より感—娘(学生)とその母親の双方向からの分析— 日本性格心理学会第9回大会発表論文集 56-57
- 秋山幹男 2000 若い母親の養育態度と親子(幼児)の性格認知—実父母との似より感をベースにして— 広島文教女子大学紀要 35 113-126
- 秋山幹男 2001 女子学生をもつ父親と母親における「娘・自分・配偶者」の似より感—実父母との似より感も合わせた性格の世代間伝達について— 日本性格心理学会第10回大会発表論文集 110-111
- 遠藤辰雄編 1981 アイデンティティの心理学 ナカニシヤ出版
- Frankl, V.E. 山田邦男・松田美佳訳 1982/1997 訳 運命を超え、自己を超えて 春秋社 (Im Anfang war der Sinn: Von der Psychoanalyse zur Logotherapie)
- Frankl, V.E. 諸富祥彦監訳・上嶋洋一・松岡世利子訳 1978/1999 訳 〈生きる意味〉を求めて 春秋社 (The Unheard Cry for Meaning)
- 五木寛之 1998 他力 講談社
- 梶田毅一 1988 自己意識の心理学(第3版) 東京大学出版会
- 梶田毅一 1998 意識としての自己 金子書房
- 加藤 厚 1983 大学生における同一性の諸相とその構造 教心研 31 292-302
- 諸富祥彦 1997 フランクル心理学入門 どんな時にも人生には意味がある コスモス・ライブラリー
- 諸富祥彦 1997 カール・ロジャーズ入門 自分が「自分」になるということ コスモス・ライブラリー
- 森岡正博 1999 現代文明は生命をどう変えるか 法蔵館
- 中井久夫 1998 最終講義—分裂病私見— みすず書房
- 中村雄二郎 1999 正念場 岩波書店
- 中村雄二郎 1992 臨床の知とは何か 岩波書店
- 小川 侃 2001 雰囲気の中の人間テーマに「環境見つめる知」—新しい現象学より— 毎日新聞 2001. 4. 21.
- 鶴見俊輔・浜田晋・春日キスヨ・徳永進 1999 いま家族とは 岩波書店

- 上田閑照・河合隼雄 1995 癒しと宗教 仏教 no31 2-36
 上田閑照 2000 私とは何か 岩波書店
 Wilber, K. 大野純一訳 1996 万物の歴史 春秋社 (A Brief History of Everything)
 Wilson, C. 由良君美・四方田犬彦訳 1972/1998 訳 至高体験 河出書房新社 (New Pathways in Psychology)
 横山紘一 1987 十牛図の世界 講談社

資 料

資料 1

自己形成 (時間軸からみた自己の定位) : 加藤 (1983) の同一性ステータスの項目

過去の危機

- ・私は、自分がどんな人間なのか、何をしたいのか、ということをかかって真剣に迷い考えたことがある。
- ・私は以前、自分のそれまでの生き方に自信が持てなくなったことがある。
- ・私はこれまで、自分について自主的に重大な決断をしたことがない。(－)
- ・私は、親やまわりの人の期待にそった生き方をする事に疑問を感じたことはない。(－)

現在の自己投入

- ・私は今、自分の目標をなしとげるために努力している。
- ・私は、自分がどんな人間で何を望みおこなおうとしているのを知っている。
- ・私には、特にうちこむものはない。(－)
- ・私は、「こんなことがしたい」という確かなイメージを持っていない。(－)

将来の自己投入の希求

- ・私は、一生けんめいのうちこむものを積極的に探し求めている。
- ・私は、自分がどういう人間であり、何をしようとしているのかを、今いくつかの可能性を持ちそれを比べながら、真剣に考えている。
- ・私は、環境に応じて、何をすることになっても特にかまわない。(－)
- ・私には、自分がこの人生で何か意味あることができるとは思えない。(－)

資料 2

自己意識 (空間軸からみた自己の定位) : 梶田 (1988) の項目を菅野 (1989) が因子分析

F1 自己受容 :

- ・私は、自分を頼りないと思うことがある。(－)
- ・私は、人より劣っていると感じることもある。(－)
- ・私は、現在の自分に満足している。
- ・私は、時々自分自身がいやになるときがある。(－)
- ・私は、他の人にくらべて能力などの点ですぐれていると思う。
- ・私は、他の人をとてもうらやましく思う。(－)
- ・私は、今のままの自分ではいけないと思うことがある。(－)
- ・私は、自分に自信をもっている。

F2 自己防衛 :

- ・私は、人からどんなうわさをされているか気になる方である。
- ・私は、自分が少しでも人からよく見られたいと思うことがある。
- ・私はよく、小さなことをくよくよと考える。
- ・私は、人にいつも見られていると感じるときがある。
- ・私は、自分が傷つくことを恐れている。
- ・私は、何かをしようとするとき、他の人が反対するのではないかと心配になることがある。

F3 他者受容 :

- ・私は、人とうまく付き合っていける方である。
- ・私は、人を全面的に信じることができる。
- ・私は、自分の心を素直に表現できる。

資料 3

発達「課題／危機」に関する項目：遠藤ら（1981）の項目リストから選択したもの

基本的信頼感対不信任感

- ・私には、「自分は自分で、決して他人ではない」という気持ちがある。
- ・私は、自分自身のやり方と、兄弟姉妹のやり方や親・先生の助言との間にいつもくいちがいを覚え、ともすると自信を失いがちです。（-）
- ・私は、他の人々からそうなるだろうと思われているものに、おそくなるだろう。
- ・私は、人生というものは、むさぼり独占することだと信じている。（-）
- ・私は、自分自身について、いつも信頼できるという確信をもっている。
- ・私は人生や人間に対して、不信の念しかもっていない。（-）
- ・私は、他人に対して過信したり、絶対に信じなかったりと、極端に走ることはない。
- ・子供の時母親からの愛情に飢えていたとか、母親と離れていたとか、見捨てられていたという感情を、今、私は持っている。（-）
- ・私は、自分自身の行動を抑えることができるという確信をもっている。
- ・私は子供の時から、何か母親やまわりの大人たちから置き去りにされ刺激に飢えていたような気がする。
- ・私は子供の時から、自分の生まれや育ちを受け入れ、その中で生きることの素晴らしさを感じている。
- ・私はどうしたらよいか分からなくなると、いつも自分のカラの中に閉じこもってしまう。（-）

自律性対恥・疑惑

- ・自分が、自律的な（積極的な）人間であることに誇りを感じ、また、他人にも同じように自律的であることを認めている。
- ・私には人が見ていると、どうもうまくやれないという気持ちがある。（-）
- ・私は、未熟で、愚かな存在（人間）として、さらしものにされているという劣等感にいつもさいなまれ、押しつぶされている。（-）
- ・私は、自分の目に映る自分がどうであるか、あるいは、他人の目に映る自分がどうであるかといった気持ちにとらわれがちである。（-）
- ・私の生活は、外的な行動の枠で束縛されるとか、規律を強制されている方が安心でき、そのような生活様式が理想的であると思っている。（-）
- ・私は、物事をうまくやり通したいということを強く願っているにもかかわらず、いつも物事がうまくいかなくなってしまうことが多い。（-）

生産性対劣等性

- ・私は、自分が何かに役立っているという有用感がある。
- ・私は人と話そうとした時や、現に話している時に、からかったり、まぜくりかえしたりする話しか方をしないと、どうもなじみにくい。（-）
- ・私は、不断の注意と忍耐力によって「仕事を完成させる」ことに最高のよろこびを感じるができる。
- ・私は社会的に無力で、母親にさえ見くびられる程まぬけな人間だ。（-）
- ・私は、自分がものを作ったり、改良したり、完全なものにしていくことができる人間だという感じを抱いている。
- ・私は人々のように自由にチャンスをつかむことができず、いつも脇の方へ追いやられ、立往生させられているような気がしてならない。（-）
- ・私は人々がもっと快適になるように、元気づけたり慰めたり、相談に乗ったりすることは、最も良いことだと思う。
- ・私は、たとえワザとらしい支持であっても、それがないと自信を保っていくことができない。（-）
- ・私は、師と仰ぐことのできる教師、あるいは私のかくれている才能を引き出してくれた教師のいることを生涯の誇りとしている。
- ・わたしは容赦のない画一化により強制された役割（例えば、いい子・勉強がよくできてよくいうことを聞く生徒）であることに当惑してしまい、学校に行きたくなったり、孤立した気分になったりしたことがある。（-）
- ・私は普通の人に比べて、男らしさもしくは女らしさに欠けていると思う。（-）

自我同一性対同一性拡散

- ・私は自分が誰であり、どのようになりたいのか、他人にどのように見えるかを本当に知っている。

- ・私は今の社会的現実の中で、はっきりと生きがいを見いだすことが出来るような人となる確信がある。
- ・私は「理想の自分」が沢山あって、どれが本当に、「なりたい自分」なのかさっぱりわからなくなっている。(－)
- ・私は自分の欲求や衝動をコントロールできるという確信をもっている。
- ・私は、いつも確かな未来に向かって有効な歩みを身につけつつあるのだという確信をもってきた。
- ・私のまわりには、あまりにも多くの局面で、変化が起こっているのです、私はすっかり疲れきってしまい不安で不安でたまらず、自分が何者なのかさっぱりわからなくなっている。(－)
- ・青年期までに身につけた役割や技術を現代の理想的な行動様式にどう結びつけたらよいか、私は非常に悩みを感じている。(－)
- ・私は一貫して自己選択あるいは自己決定に自信をもち続けている。
- ・私は「他人」との関わりあいの場で、いつも「私」であり、またいつまでも「私」であり続けると、はっきり感じとっている。

—平成 13 年 10 月 9 日 受理—